

外国語教育メディア学会（LET）
関西支部 2015 年度春季研究大会
発表要項集



日 時： 2015 年5月23日（土） 9:50～17:15

場 所： 大阪電気通信大学(寝屋川キャンパス)
Osaka Electro-Communication University
〒572-8530 大阪府寝屋川市初町 18-8
<http://www.osakac.ac.jp/>

主 催： 外国語教育メディア学会（LET）関西支部
<http://www.let-kansai.org/>

事務局： 〒669-1337 三田市学園2丁目1 番地
関西学院大学理工学部 氏木道人研究室内
Tel. 079-565-7028
E-mail: kansaiilet@gmail.com

プログラム

9:00-15:50

受付■大阪電気通信大学寝屋川キャンパス J号館 6階

9:50-10:05

開会行事■ J号館 6階小ホール

司会◆氏木 道人（事務局長・関西学院大学）
挨拶◆橘 邦英（会場校・大阪電気通信大学学長）
挨拶◆若本 夏美（支部長・同志社女子大学）

10:10-12:00

シンポジウム■ J号館 6階小ホール

「英語教育における音声指導と評価：スピーキングと発音」

パネリスト ◆小泉 利恵（順天堂大学）
◆近藤 悠介（早稲田大学）
◆斉藤 一弥（早稲田大学）
モデレーター ◆菅井 康祐（近畿大学）

9:30-16:00

業者展示■ J号館 5階エレベーターホールおよび廊下

12:00-13:10

昼食

12:00-12:40

運営委員会■ J501 教室

12:40-13:10

支部総会■ J号館 6階小ホール

13:10-15:25

研究発表・実践報告 ①13:10-13:40 ②13:45-14:15 ③14:20-14:50 ④14:55-15:25

第1室（研究発表・実践報告）■ J504 教室

司会◆深田 将揮（畿央大学）

- ① 英語絵本における繰り返しパタンの分析：複雑系理論からのアプローチ
新多 了（名古屋学院大学）・間所 智子（エデュケーションネットワーク）
- ② 日本人高校生における英語全般に対する自己効力感、4技能別自己効力感、及び英語力の関係性
高橋 昌子（関西大学院生）
- ③ 高等学校英語授業における Input, Intake から Internalization へつなげる指導法比較—音読と音読筆写の実証研究
道古 卓也（関西大学院生）
- ④ 検定教科書をフル活用した英語授業の効果：無理なく、4技能の向上を目指して
戸田 行彦（滋賀県立守山中学校）

第2室（研究発表・実践報告）■ J503 教室

司会◆大塚 朝美（大阪女学院大学）

- ① 発音記号学習に対する大学生の意識の変化：KJ法による分析
中西 のりこ（神戸学院大学）・阪上 潤（立命館大学（非））
山本 祐太（関西大学院生）
- ② 学生による相互評価及びその可視化の試み：相互評価が学習意欲に与える影響
笠巻 知子（立命館大学（非））・三木 訓子（立命館大学（非））
- ③ 日本人 EFL 学習成功者の学習方略
片山 かおり（関西大学（非））
- ④ スマートフォンを用いたバイリンガル動画作成による日本文化紹介と異文化交流
塩見 佳代子（立命館大学）

研究発表 ①13:10-13:40

Classroom Tips ②13:45-13:55 ③14:05-14:15 ④14:25-14:35 ⑤14:45-14:55 ⑥15:05-15:15

第3室(研究発表・Classroom Tips) ■ J502 教室

司会◆福島 祥行(大阪市立大学)

① An Online Learning Community's Effect on the Motivation of Japanese EFL Learners

MIYAKE, Kenn(大阪教育大学院生)・NISHIKAWA, Misaki(大阪教育大学院生)

YOSHIDA, Haruyo(大阪教育大学)

② 実演紹介: 英語不規則動詞変化形提示ツールとフラッシュ型例文・対訳提示ツール

神谷 健一(大阪工業大学)

③ トランプを使った討論活性化と評価

成田 修司(大阪大学(非))

④ 学習者の積極的な授業参加につながるトランプの活用法

浦野 研(北海学園大学)

⑤ ノートアプリで授業をよりアクティブに

中西 正樹(摂南大学)

⑥ 授業と連携した自学ノートの活用方法

中原 智昭(東大阪市立意岐部中学校)

Classroom Tips は、
Ustream 中継や YouTube
で公開されます。

15:25-15:35

休憩

15:35-17:05

基調講演 ■ J 号館 6 階小ホール

「英語到達度指標 CEFR-J を用いた統合的英語学習評価環境の整備」

講師紹介◆小山 敏子(大阪大谷大学)

講師◆投野 由紀夫(東京外国語大学)

17:05-17:15

閉会行事 ■ J 号館 6 階小ホール

司会◆氏木 道人(事務局長・関西学院大学)

挨拶◆吉田 晴世(副支部長・大阪教育大学)

17:20-19:20

懇親会 ■ J 号館 1 階 学生食堂

司会◆伊庭 緑(甲南大学)

挨拶◆杉森 直樹(副支部長・立命館大学)

お知らせ

- 参加者は、受付にて必ず参加登録票にご記入のうえ、ネームホルダーをお受け取りください。LET 会員は無料です。非会員の方は当日会費 2,000 円(大学院生は学生証を提示していただくと 1,000 円)を受付でお支払いください。また、学部生は無料でご参加いただけます。なお、支部大会当日にご入会いただくことも可能ですので、支部事務局(受付)までお申し出ください。
- 当日 J 号館 1 階の学生食堂は営業しておりますのでご利用ください。館内は全面禁煙です。
- 懇親会は J 号館 1 階の学生食堂にて開催いたします。参加費は 2,000 円(学生 1,000 円)です。当日、大会受付にてお申し込みください。おいしいワインを用意しております。
- 駐車場はありませんので、お車でのご来場はご遠慮ください。

英語到達度指標 CEFR-J を用いた 統合的英語学習評価環境の整備

投野 由紀夫（東京外国語大学）

CEFR-J は欧州言語共通参照枠（CEFR）に準拠し、初級中級レベルの下位区分を設けて、日本の英語教育に特化した汎用枠として構築された(投野 2013)。下位区分の CAN-DO デスクリプタは数度の改訂と 5000 人以上の CAN-DO 調査をもとに本家の CEFR とほぼ同様の方法で難易度の妥当性検証を行っている。2012 年 3 月にバージョン 1 が公開され、3000 以上の学校、企業、団体、教員、研究者にダウンロードされ幅広く利用されている。

この講演では CEFR-J の構築プロセスを簡単に解説し、特に CEFR-J 活用のための関連資料の整備について紹介する。小中高大社会人を一貫する英語汎用枠を設ける意義、それに関連する語彙・文法・表現のコーパスを活用した対応付けの手法、CAN-DO を具体的なタスクに落とし込む部分のプロセスを助けるリソース利用、シラバスの体系化による教科書・教材作成の均質化、評価方法の改善、教員研修の効率化など、さまざまなメリットがあることを示したい。その中でも特に以下のいくつかのプロジェクトに関して紹介する：

1) CEFR-J 付属語彙表

A1～B2 までの語彙表。English Vocabulary Profile, Threshold Level などの情報を統合している(完成済み)

2) ELP CAN-DO リスト・データベース

欧州各国で利用されている ELP の CAN-DO を 2000 以上集約し、約 650 の CAN-DO にまとめたもの(完成済み)

3) 各種中学校英語教科書と CEFR-J との対応表

現行の教科書は CAN-DO ベースではないが、各レッスンの目的と CEFR-J の CAN-DO を内容的に可能な限り対応させたもの(進行中)

4) コーパス利用のレベル別文法・表現インベントリ整備

インプット(ELT 教材)コーパスと学習者コーパスから機械学習を用いて CEFR-J レベルの文法・表現を抽出し、インベントリを整備(進行中)。

5) 辞典、会話教材、NHK 英語データベースなどとのリンク例

市販の教材群と CEFR-J のコラボレーションの事例紹介

6) 東京外国語大学 CEFR-J x 27 プロジェクト

SGU プロジェクトの一環で 27 言語をすべて CEFR-J で教育評価するという 10 年プロジェクトの紹介

これらのプロジェクトを解説しながら、CEFR-J を用いた総合的英語学習&評価の環境整備についてビジョンを示したい。

英語教育における音声指導と評価：スピーキングと発音

パネリスト

小泉利恵（順天堂大学）

近藤悠介（早稲田大学）

斉藤一弥（早稲田大学）

モデレーター

菅井康祐（近畿大学）

ペア型会話テスト：授業内での実施と採点を目指して

小泉 利恵（順天堂大学）

スピーキング能力、特に対話力を育成するために、生徒同士のペア活動を授業中に行うことは多い。しかし、その活動で伸ばした力を評価する取り組みにはばらつきがあるだろう。本発表では、生徒がペアを組んでロールプレイやディスカッションを行う、ペア型会話テスト(paired oral)を取り上げ、その利点と難点を示しながら、授業内での評価法の提案を行う。

スピーキングテストで典型的な形式は、生徒がマイクに向かって一方向に話すモノログ型か、教師対生徒の面接型である。モノログ型は一人で話すときの発話を評価できるが、対話時の力を直接見ることは難しい。教師対生徒の会話では、生徒の発話を助けながら会話を持続させることができる一方、質問に生徒が答えるだけなどの「対等でない会話」が多くなり、生徒が使う発話機能や測れる能力が限定されてしまう。ペア型会話テストでは、生徒が互いに協力し合って対等な会話を作り上げることが多く、より広い発話機能や能力が測れるとされる (Galaczi & French, 2011)。そのため、ケンブリッジ英検のスピーキングテストにはペア型のセクションがある。日本でのペア型会話テストの研究は限られるが、授業内でペア活動を行っていれば、テストとして行うことは可能であろう。会話を独占しがちなペアと組んだ生徒が十分に力を発揮できないなど、誰とペアになるかによって公平でない場合もあるが、難点よりは利点の方が上回るとされ (Galaczi & French, 2011)、今後推奨される形式と言える。

ペア型会話テストを授業内で実施することは、比較的容易である。IC レコーダーやコンピュータ、携帯電話等で会話を録音し、録音ファイルを後で提出させれば、授業の一部を使うだけで済む。ただ、会話の声が聞き取りにくいこともある、テストタスクの統制が難しい等の困難点を考慮すると、その形式だけでなく、別室にて実施することも必要である。一方、発話の採点については、ペア型会話テストを持続可能にするためには、授業内でできるだけ採点できる形を考えたい。(a) 形成的評価の位置づけであれば、各授業で評価する生徒を数名決め、その生徒とペアの会話を聞いてその場で評価し、次の授業では別な生徒を評価する、(b) 定期テスト等の総括的評価であれば、授業内に時間を設けて全員評価するなどの方法は考えられる。自己評価や相互評価と教師評価を組み合わせる方法もある。また、評価基準については、評価ポイントを絞り、持ち時間内に評価可能なものを使うことも必要だろう。

「意図した対話力が測れているか」という妥当性の観点から、ペア型会話テストやそのタスクを作成し、検討することも重要である (小泉, 2015)。本発表では、Koizumi, In'nami, and Fukazawa (2014) やその後の研究・実践に基づき、ペア型会話テストのタスクや評価基準の妥当性やその特徴についても報告し、評価の手助けになるような情報を提示したい。

発話自動採点システムの研究と開発

近藤 悠介（早稲田大学）

外国語としての英語の能力を評価・測定する場面にコンピュータが用いられるようになり、言語テストに大きな影響を与えた。多肢選択式など客観的な採点が可能な問題については、項目反応理論に基づいて採点するコンピュータ適応型テストなどが幅広く利用されているが、客観的な評価が難しい発話能力の採点に関しては、コンピュータを利用したテストが普及しているとは言い難い。本発表では、この理由を明らかにすべく、発話自動採点の研究・開発における問題について議論する。

本発表では、まず、発話自動採点システムの開発過程を概観する。発話自動採点システムは、ある発話に対して付与された評価とその発話の特徴量（話す速さやポーズの数など）との関係を検証し、予測方法を得る。この予測方法を用いて、音声認識技術によって測定可能な発話の特徴量に基づいて、その発話に付与されるであろう評価を予測する。このようなシステムの開発過程を第二言語習得、言語テストなど英語教育関連分野の視点から概観する。

次に、発表者がこれまでにを行った研究を参照しながら、発話自動採点システムの開発において解決しなければならない以下の 3 つの問題について議論する。

1. 評定者に関する問題： 開発過程において評定者による評価はどの程度の信頼性を確保すべきなのか。また、評定者の訓練には効果はあるのか。さらに、評価が付与された発話が少ない場合でも正確な予測ができるのか。
2. 音声認識技術に関する問題： 音声認識技術によって得られる発話の特徴量のみを利用して測定したいものが測定できるのか。また、音声認識技術により発話誘出タスクが制限されることで、評価・測定しようとする発話はどの程度制限されるか。
3. 予測方法に関する問題： 予測方法には機械学習の手法がしばしば使用されるが、最適な予測方法および予測変数として使用する発話の特徴量はどのように選ぶべきか。

e-FonF が日本人学習者のスピーキング能力にもたらす影響について： 音声・語彙・文法学の観点から

斉藤 一弥（早稲田大学・商学大学院）

将来、国際社会で活躍する優秀な日本人のビジネスリーダー、研究者をより多く育成する上で最も重要な問題の一つが、業務を英語で支障無く遂行する「オーラルコミュニケーション能力」を習得することである。近年注目されている英語教授法の一つに、Google Hangout などのオンラインツールを用いて 英語圏の大学生との英会話を授業に取り入れ、自然なコミュニケーションの中で英語の言語構造に対する「気づき」を促進し、正確性と流暢性というスピーキング能力の 2 つの側面を向上させる focus-on-form instruction (e-FonF) がある。本発表では、実際に日本人英語学習者 ($N = 50$) が 1 セメスターの e-FonF を受講することで、どの様にスピーキング能力を向上することが出来るのか、音声・語彙・文法学の観点から量的考察を行う。最新の第二言語教育研究に基づいた e-FonF を通して英語に触れる日本人の英語発話能力を調査することは、「日本の大学における英語学習が到達可能なスピーキング能力の見本」、またその「問題・限界点」を具体的に示すこととなる。

英語絵本における繰り返しパターンの分析： 複雑系理論からのアプローチ

An Analysis of Patterns of Repetition in Children's Picture Book Stories:
A Complex Dynamic Systems Approach

新多 了 (名古屋学院大学)

間所 智子(エデュケーションネットワーク)

キーワード：英語絵本，繰り返し，複雑系理論

1. 研究の背景

小学校での英語教科化に向けて，チャンツやフォニックス、歌に加え，英語絵本を使った活動も効果的なアプローチとして注目を集めている。絵本を使った英語教育は子どもたちの動機づけを高め，外国の言葉や文化に積極的な態度を育成すると考えられ広く利用されてきたが（リクソン，2013），具体的に絵本のどのような特徴が子どもたちの英語学習を促すのか十分に検証されていない。

絵本には子どもたちの理解を促進するための様々な手法が組み込まれているが，本研究では複雑系理論の立場から学習に不可欠な要素として繰り返し(repetition)に焦点を当てる（新多・馬場，2014-2015）。本研究では，英語絵本の中で繰り返しがどのように用いられ，子どもたちの英語学習をどのように促進するか分析を行った。

2. 研究方法

長年絵本を使った小学校での英語活動に携わって来た教師によって選定された 30 冊の絵本（田縁，2014）の中でどのような繰り返しパターンが見られるか，Cameron (2001)によるストーリーの談話構造の枠組みを使い検証を行った。

3. 結果と考察

分析の結果，30 冊中 29 冊で何らかの繰り返しが使用され，その中で（1）出来事（またはアクション）の繰り返しと，（2）言語の繰り返しの二つのパターンが主に使用されていた。（1）では，同じ出来事（またはアクション）の繰り返しを通して，子どもたちがストーリーの展開を予測しやすくとともに，ストーリーの最後で繰り返しパターンを破ることで変化を与えるねらいが見られた。また（2）では，特定の文法構造を繰り返すことで，聞き慣れない単語があっても，ストーリーの理解を促すねらいが見られた。また単語を変えながら同じ文法構造を繰り返すことで，自然に語彙と構造が身に付く工夫も見られた。複雑系理論の視点から，2つのパターンは相互に密接に関連し合いながら(co-adaptation)，ストーリーの結末に向かって収斂していく(attractor)構造を持っていると考えられる。

今回得た絵本の繰り返しパターンに関する理解を基に，絵本を使った活動が子どもたちの学習にどのような効果を与えるか、今後研究を推進していく。

参考文献

Cameron, L. (2001). *Teaching Languages to Young Learners*. Cambridge: Cambridge University Press.

田縁眞弓 (2014) 7 分間のマジックタイム：小学校英語活動における絵本の導入 中部地区英語教育学会 愛知地区研究会招待講演.

新多了・馬場今日子 (2014-2015) 複雑系で英語学習観が変わる：SLA の最新理論から 『英語教育』2014 年 10 月号-2015 年 3 月号連載.

シーラ・リクソン (2013) 『チュートリアルで学ぶ「新しい小学校英語」の教え方』. 玉川大学出版部.

日本人高校生における英語全般に対する自己効力感、

4 技能別自己効力感、及び英語力の関係性

Relationships between General English Self-efficacy, Self-efficacy for English Skills, and English Proficiency: A Study of High School Students in Japan

高橋 昌子（関西大学 大学院生）

キーワード：自己効力感、総合的な英語能力、4 技能

1. はじめに

自己効力感は、一般的に能力や学業成績と高い相関があるとされているが、SLAの分野では研究の多くが（英語の）特定の技能と自己効力感の相関のみを見ており、総合的な英語能力と自己効力感の関係について調査した研究の間では、結果が分かれている（Tseng, 2013）。そこで本研究では、日本人高 校生の英語に対する自己効力感の程度を明らかにし、その英語全般に対する自己効力感や4技能別の自 己効力感が彼らの英語能力をどれほど説明することができるのか調査を行った。また、英語全般に対す る自己効力感と技能別の自己効力感の関係も調査し、それぞれの調査結果が生徒の英語能力によって異なるのかも調べた。

2. 参加者と手順

参加者は、西日本にある高校5校の高校生544人であった（1年:184名、2年:118名、3年:242名）。クローズテストの結果により、英語力の高い群(155名)と低い群(139名)に分類した。質問紙及びテストは中間試験の後2週間をはずして担任もしくは英語科教員によって行われた。

3. 質問紙と選択式クローズテスト

英語全般に関する自己効力感および4技能に対する自己効力感を測定する質問紙は、Hamada (2011), Pintrich & De Groot (1990), Ueki & Takeuchi (2013),などを参考にして独自に作成した。選択式クローズテストは英検準2級のリーディング問題より作成した。

4. 結果と考察

分析の結果、全体では英語全般に対する自己効力感と英語能力に有意に弱い相関があった。4技能中では、リーディングに対する自己効力感が有意に弱い相関があり、英語全般に対する自己効力感との結びつきはリーディングとライティングに対する自己効力感が高かった。英語力の高い群は、英語全般に対する自己効力感が英語力とより強い相関があり、英語力が低い群はまったく相関がなかった。これは、Tseng (2013)の結果を支持するものであり、今後の追証が待たれる。

参考文献

- Hamada, Y. (2011). Torikumi yasui shadowing houhou no kenkyu: Zikokoryokukan no ikuseito kosutokan no yokusei (A study on a learner-friendly shadowing project: Improvement of Self-efficacy and reduction of costs). Remedial Kyoiku Kenkyu (Remedial Education Research), 6, 71-78.
- Pintrich, P. R., & De Groot, E. V. (1990). Motivational and self-regulated learning components of classroom academic performance. *Journal of Educational Psychology*, 82, 33-40.
- Tseng, M. (2013). Is self-efficacy correlated with English proficiency levels? —A case study of Taiwanese arts students. *Studies in English Language Teaching*, 1, 258-363.
- Ueki, M., & Takeuchi, O. (2013). Forming a clearer image of the ideal L2 self: The L2 motivational self system and learner autonomy in a Japanese EFL context. *Innovation in Language Learning and Teaching*, 7, 238-252.

高等学校英語授業における Input, Intake から Internalization へつなげる指導法比較-音読と音読筆写の実証研究-

Towards the Internalization of L2 Input: A Comparative Study of Oral Reading
and Oral Transcription Activities in a Japanese High School EFL Context.

道古 卓也（関西大学 大学院生）

キーワード：音読，筆写，内在化（internalization）

1. はじめに

外国語習得のモデルとして心理言語学的な観点からは input, intake, output の重要性が指摘されている（VanPatten, 2004）。しかし、現在の日本の高等学校の英語授業では英文の理解だけで終わってしまい、定着・内在化（internalization）のための活動が不足していると言われている（金谷, 2007, 2011; 鈴木・門田 2012）。本研究の目的は、その問題を解決するため、教科書本文に含まれる語彙と文法、構文を対象とし、理解から定着へつなげるために、限られた時間で効果的に定着させる方法を探ることである。高校生を対象とし、定着させるための方法として音読と音読筆写を採用し、リサーチクエストには、教科書本文に含まれる語彙と文法、構文を対象とし、音読と音読筆写はどのように internalization に影響を与えるのか、を設定し、検証した。

2. 参加者と手順

参加者は、大阪にある公立高校2年生2クラス78名である。彼らの多くは中学校時代に英語学習にまわっており、英語習熟度は初級である。この78名を音読群39名（1クラス）と、音読筆写群39名（1クラス）に分けて研究が行われた。教科書本文の内容理解の後、preテスト、それに続き1日1回10分の音読、音読筆写活動を行い、その後 immediate テストを実施し、1週間後に delayed テストを実施した。

3. 測定のためのテスト形式

単語記述の空所補充問題、単語選択の空所補充問題、語を単位とした並べ替え問題、削除された語を本来の位置に戻す本文再生問題の4つを用いた。この4種の問題種は、「内容理解の済んだ英文でその英文素材を100%身につけてほしい、すなわち、構文もきちんと把握し、語も記憶し、形式的にも内容的にも理解し、また記憶すべきものは記憶」（静, 2002, p. 196）することを念頭に置いた問題例である。

4. 結果と考察

分析の結果、（1）音読と音読筆写はどちらも internalization に効果的であること、（2）同じ時間で行うなら音読を繰り返したほうが有利であること、（3）スペリングは音読筆写のほうが効果的であるが音読のみでも internalize されること、そして（4）二重符号化理論は前提として繰り返しが必要であること、の4点が明らかになった。

参考文献

- 金谷 憲 (2007). 『高校英語教育を変える和訳先渡し授業の取り組み』 東京：三省堂
 金谷 憲 (2011). 『高校英語授業を変える！訳読オンリーから抜け出す3つの授業モデル』 東京：アルク
 静 哲人 (2002). 『英語テスト作成の達人マニュアル』 東京：大修館書店
 鈴木寿一・門田修平（編著）(2012). 『（フォニックスからシャドーイングまで）英語音読指導ハンドブック』 東京：大修館書店
 VanPatten, B. (2004). Input processing in second language acquisition. In B. VanPatten (Ed.), *Processing instruction: Theory, research, and commentary* (pp. 5-32). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

検定教科書をフル活用した英語授業の効果 無理なく、4技能の向上を目指して

The Effects of English Teaching in Classroom Using a Textbook Only: To Improve Four Skills

戸田 行彦（滋賀県立守山中学校・高等学校）

キーワード：ペアワーク，通訳メソッド，音読筆写

1. はじめに

今年度から中学2年生を担当し1年が過ぎました。それまでの6年間は高校で、卒業後も英語を学び続けてほしいという思いをこめて、より良い英語授業創りに努めてきました。この1年間は、昨年度まで前任校で3年間持ち上がった経験を生かし、中学2年生ではどのようなことができるのかと考えました。その結果、*New Horizon English Course 2*（東京書籍）をフル活用することが英語力の向上につながると信じ、実践を進めてきました。

2. 参加者と手順（実践内容）

中学2年生を2クラス担当しました。英語を教科として学び始めて1年が経過した2年生4月から3月までの実践を紹介したいと思います。使用教材は教科書のみですが、①単語シート、②通訳練習シート、③マイトレーニングブック、④ディクテーションテストを作成しました。音声・文字・意味の3つを正しくマッチングさせたいと思い、①文字からではなく音声から入る語彙指導、リスニングから入る本文の概要把握、②内容理解後の通訳メソッドによる一斉&ペアワーク音読や意見交換、④家庭で復習に用いる音読筆写ノートを通し、骨太の英語力育成を目指しました。定期テストでも精読・速読問題の みならず、⑤リスニングテスト（ディクテーション・通訳問題）を多く出題し、聞くこと、書くことの正確性も求めてきました。

3. 学習効果アンケートの実施

日ごろの授業中に行っている上記5つの項目について学習者自身の英語力向上に効果があると思うかというアンケートを3学期に実施しました。

中2生 76人(%)	5(効果大)	4(効果有)	3(不明)	2(効果少)	1(効果無)	5段階(Av)
①単語シート	44.7	44.7	7.9	2.6	0.0	4.3
②通訳シート	60.5	35.5	1.3	2.6	0.0	4.5
③トレーニングブック	55.3	32.9	7.9	2.6	1.3	4.4
④小テスト	51.3	40.8	6.6	1.3	0.0	4.4
⑤リスニングテスト	52.6	30.3	15.8	1.3	0.0	4.4

4. 結果と考察

分析の結果、筆者が1年間使用してきた教材①～④は学習者に高く支持されていることがわかった。また定期考査で実施していた⑤リスニングテスト（ディクテーションテスト、英→日、日→英通訳）も効果があったと学習者たちは認識していることも判明した。今後は外部試験（学力推移調査や GTEC）でも、英語力の伸長が見られるのか経緯観察する必要がある。

参考文献

門田修平（2007）『シャドーイングと音読の科学』東京：コスモピア。

村野井仁（2006）『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』東京：大修館書店。

発音記号学習に対する大学生の意識の変化： KJ 法による分析

Changes in University Students' Attitude towards Learning Phonetic Alphabet:
Analyses Using KJ Method

中西 のりこ（神戸学院大学）
阪上 潤（立命館大学）
山本 祐太（関西大学 大学院生）

キーワード：英語発音，発音記号，KJ 法

1. はじめに

英語音声の指導に関して，学習指導要領は「音声指導の補助として，発音表記を用いて指導することができる」（文部科学省，2008，2009）としている。中学校教科書でも新出単語や発音を扱ったページに発音記号を載せているものがある。しかし発表者が担当する大学英語クラス受講生のうち，中学・高校で発音記号を習った経験がある学生はわずか 2 割程度であった。そこで本研究では，大学英語授業における発音記号を用いた指導の効果と学習者の意識を，受講生へのアンケート調査結果から分析する。

2. 方法

非英語専攻の大学 1，2 年生（2 大学 6 クラス， $n=136$ ）を対象とした履修必修英語クラスにおいて，毎回の授業時間の一部を発音練習にあて，後期授業では個別音の発音の仕方についての理解を促すため発音記号を用い，記号の書き取りテストも実施した。全ての授業終了時に課した自由提出アンケートへの回答のうち，「この授業で発音記号を習い始めた時の気持ち（460 文）」「半年間の授業を終えた今感じていること（558 文）」を KJ 法を用い分析した。

3. 結果

分析の結果，発音記号導入時の気持ちについては「難しい・やりたくない」という回答が目立ったが，半年間の授業終了時には学習課題について「楽しかった・頑張った」，学習結果について「英語の発音や発音記号に対する興味，関心が増した・向上した」というポジティブな印象を裏付ける回答が増した。中高教育段階でも発音記号を導入して欲しかったという要望や，学習したことを将来につなげようとする意欲的なコメントも見られた。

4. 教育的示唆

上述のように，学習指導要領では発音表記を用いて「指導することができる」という控えめな表現を用いている。しかし本研究の分析結果から，学習者自身が発音記号を用いた学習に対して意義と効果を実感しており，発音記号の導入は英語音声学習に有効であったことがうかがわれた。発音記号の書き取りテストについては，当初は負担であったというコメントが多く見られたが，学期終了時にはテストが学習意欲を促進したという記述も見られ，学習者が英語音声に関心を持つ契機となったことが示唆された。発表時には，学習者が「難しい」と感じた点や「楽しい」と感じた点を精査することにより，英語教育現場で発音記号を使用する際の留意点をまとめる。

参考文献

文部科学省 (2008). 『中学校学習指導要領』 京都：東山書房。
文部科学省 (2009). 『高等学校学習指導要領』 京都：東山書房。
川喜田二郎 (1986). 『KJ 法—混沌をして語らしめる』 東京：中央公論社。

学生による相互評価及びその可視化の試み:

相互評価が学習意欲に与える影響

Visualizing Peer-assessment in the Classroom: The Effects on Student Motivation

笠巻 知子 (立命館大学)

三木 訓子 (立命館大学)

キーワード: 相互評価, 評価の可視化, オーラルプレゼンテーション, 学習意欲, 授業参加

1. 背景

学生による相互評価は近年高等教育において、学習効果を高める目的で授業参加活動の一部として実践されている。(Hanarahan, & Issacs, 2001; Nakamura, 2002; 藤原他 2007)。筆者が指導する oral presentation の授業では、学生が教員と同じ evaluation sheet を用いて相互評価を行ってきたが、相互評価が学生の心理面に与える影響については検証が十分行われていない。本研究では、evaluation sheet の他に、発表のパフォーマンスを学生が挙手で相互評価し、それが学習意欲に及ぼす影響を明らかにするためにアンケート調査を実施した。

2. 対象学習者

学習者は、滋賀県草津市の大学生で、筆者（笠巻・三木）担当 2 クラスの合計 136 人であった。彼らは、必修で英語の科目を半年間履修しており、本研究には半年間参加した。

3. 実践内容

学習者は 1 グループ 3 人～4 人の 10 グループに分けられ、プレゼンバトルと銘打ったポスタープレゼンテーションをすることを求められた。毎回の授業において 2 グループずつ発表し、発表しないグループはオーディエンス兼評価者となった。2 グループの発表後、オーディエンスがより優れていると判断したグループに挙手することで勝ち負けを決めた。より多くの挙手を得たグループは、再度プレゼンテーションを行った。

4. 調査方法

学生による相互評価及びその評価の可視化が、学生の学習及び学習意欲にどのように影響したかを調べるため、自分のグループが挙手により選ばれたかどうか、挙手による勝ち負けについてどう思うか、そのやり方が学習意欲を高めたかどうかについて、学期末にアンケート調査を行った。

5. 結果

学習意欲を高めると答えた学生の方が、より多くの挙手を得たグループに所属している傾向にあった。このことから、学生の相互評価およびその評価が可視化されることが学習意欲を高めるとまでは言えないが、少なくとも学習意欲を阻害するものではないことがわかった。

参考文献

- Hanarahan, J., S. & Issacs, G. (2001). Assessing Self- and Peer-assessment: the students' views. *Higher Education Research & Development*, 20(1), 53-70.
- Nakamura, Y. (2002). Teacher assessment and peer assessment in practice. *Educational studies*, 44, 203-215.
- 藤原康弘・大西仁・加藤浩 (2007). 公平な相互評価のための評価支援システムの開発と評価—学習成果物を相互評価する場合に評価者の選択で生じる「お互い様効果」—『日本教育工学会論文誌』 31(2), 125-134.

日本人 EFL 学習成功者の学習方略

Learning Strategies Used by Successful Japanese EFL Learners

片山 かおり（関西大学 非常勤講師）

キーワード：GLL，EFL，メタ認知

1. はじめに

グローバル化が進む中、英語の必要性は高まっている。仕事で急に英語が必要になるという事も多い。英語力の向上は日本の将来にとって極めて重要とされているが、国際的な英語能力試験の結果を見ると日本人の英語力は低い。そこで本研究では日本という EFL 環境における英語学習を成功に導く指針を探るため、1. 高い英語力を身に着けた日本人 EFL 学習者の学習方略、2. 大人になってから本格的な学習を始め高い英語力を獲得した日本人 EFL 学習者の方略の特徴を明らかにした。

2. 参加者と手順

参加者は英語通訳クラスの受講生 35 人で、日本で生まれ英語学習を 12 歳以降に開始しており、英語圏に 1 年以上滞在した経験はない。全員が通訳者、英語教師など英語を日常的に使う仕事についており、保持する英語資格や試験の成績から高い英語力を持つ学習成功者 (GLL) であると判断される。データの収集、分析は竹内(2003)を参考に行った。実験参加者に英語学習開始時から現在までの英語学習を振り返り、どのような方略を実践したかを各自の判断で区切った初期、中期、後期、現在の 4 段階に分けてできるだけ詳しく質問紙に日本語で記述するよう指示した。方法の抽出、分類に関しては、メタ認知方略とスキル別方略に二分し、スキル別方略はさらにリスニング、リーディング、スピーキング、発音、単語、ライティング、グラマーの 7 スキルに分けて行った。また参加者の中で大人になってから本格的に英語学習を始め高い英語力を獲得した 2 人に焦点をあて、質問紙に加えてインタビューを行い実験参加者全体の方略使用と比較することでその特徴を明らかにした。

3. 結果と察

分析の結果、高い英語力を身に着けた日本人 EFL 学習者はメタ認知方略を多く使っており、スキル別方略については EFL 環境で欠如しがちな要素を補うような方略を好んで使っていることが明らかになった。また、大人になってから本格的な学習を始め高い英語能力を獲得した 2 人の学習者については、実験に参加した他の GLL 以上にメタ認知方略を多く使用している点が特徴的であった。本研究の結果、日本人 EFL 学習者の学習を成功させるにはスキル別方略に加えてメタ認知方略が大切であり、遅い時期から本格的な英語学習を始める場合はその重要性が一層高くなることが示唆された。

参考文献

Gu, P. Y. (2003). Fine brush and freehand: The vocabulary-learning art of two successful Chinese EFL learners. *TESOL Quarterly*, 37, 73-104.

竹内 理 (2003). 『より良い外国語学習法を求めて—外国語学習成功者の研究—』 東京：松柏社

スマートフォンを用いたバイリンガル動画作成による 日本文化紹介と異文化交流

Introducing Japanese Culture through Bilingual Video Production Using Smart Phones

塩見 佳代子 (立命館大学)

キーワード：情報発信(日本文化紹介)、動画作成、異文化交流

1. はじめに

多くの大学生が日常的にスマートフォンを使用している昨今である。その状況を鑑み、英語のクラスでスマートフォンを活用して英語と日本語によるバイリンガル動画撮影を行い、海外の大学生に向けて情報発信を行なった。本発表では、動画で発信した情報の内容と動画作成から学生自身が学んだことや、情報を受け取った海外の学生のコメントも紹介し、動画作成と異文化交流に関する実践報告を行なう。

2. 参加者と手順

2014 年度後期 CALL クラスのアクティビティの一つとして、経営学部国際経営学科 1 回生 3 クラスの学生計 80 名が、アメリカの二つの大学で日本語を学んでいる学生とブログ交流を行なった。その内、一クラス 30 名は、英語と日本語による情報発信の動画撮影をし、クラスで評価をすると同時に、ブログ相手先の大学に動画を送りコメントをもらった。さらに、アメリカの大学生がグループで作成した大学紹介の動画も視聴してコメントを送った。今回の発表では、日本人大学生が作成した動画プロジェクトを中心に発表を行なう。

ブログ交流は 10 月初めから 1 月中旬にかけて行なったが、動画プロジェクトは、クラスの後(第 10～13 週)にかけて導入した。手順は、トピック選択、内容企画、スクリプトライティング、撮影場所選定、動画撮影、動画ファイル提出と海外の大学への送信、動画ビデオ視聴、クラス内での評価と振り返り、海外からのコメント受信とそれに対する返信である。なお、動画内容は、学生は「自己紹介」「大学紹介」「日本文化紹介」の中から、各自の関心があり取り組みやすいものを一つ選択し、1 名あるいは 2 名のペアで動画作成を行なった。

3. 結果と考察

動画で情報発信、特に日本語文化を紹介したことへのアンケート結果は次のようになった。(1)「まだ まだ自然な英語が話せてないと思った」「改めて自分の英語を聞くと、まだまだだと学習意欲を促される」と、英語による発信の難しさと更なる英語学習の必要性を感じた意見。(2)「昔より簡単に動画を作れるようになったので、どんどんこのような授業が増えてほしい」「英語を話す楽しさを学んだ」「意外と動画作成のアクセスが楽しかった」「英語で人に伝えるというのはあまり経験なかったので良かった」と、動画作成と英語を話すことの楽しさを述べたコメント。(3)「日本の文化をたくさん伝えられて嬉しい」「日本文化を外国の人にもっと紹介してみたいと感じた」「私達にとって何気ない風景や音楽が、見る人にとっては興味がわくものになっていて視点の違いがオモシロイと思った」と日本文化を海外に向けてもっと発信したい感想を述べた者もいた。動画作成により、日本文化を海外に向けて情報発信することの難しさや楽しさを体感し、自分の英語力に対する内省と今後の英語学習への意欲や異文化交流の大切さを知る機会を持つことができたようである。

参考文献

松本秀幸 (2012)『iPhone 英語勉強法 書く&話すトレーニング』 日本実業出版社

An online learning community's effect on the motivation of Japanese EFL learners

日本人英語学習者のモチベーションに対するオンライン学習コミュニティの効果

Miyake, Kenn (大阪教育大学 大学院生)
Nishikawa, Misaki (大阪教育大学 大学院生)
Yoshida, Haruyo (大阪教育大学)

Key Words: Community, Motivation, Social Network

1. Introduction

While there are many applications of ICT to English education in recent times, much of online learning is dependent upon the individual learner's motivation. Differing from classroom learning, online learning has received criticism such as the difficulty in establishing student-teacher interactions and students finding themselves unable to remain in online courses in comparison to face-to-face courses (Jaggars, Edgecombe, & Stacey, 2013). In this research, under the coaching of two graduate students, the functions of existing online learning services and social networks were used in order to form a community of EFL learners. The community featured frequent posts which related to English language learning that the participating students read and commented on. Through this system, this study sought to measure the effects that participating in an EFL social network community had on the motivation of the learners.

2. Participants and methodology

26 university students in Osaka, Japan (students who had received at least one year of English education at the university level and graduate students in the Department of English Education) participated in this study for a period of one month. They were divided into a treatment and control group. The former group received instructions on how to access the community site and were sent notifications on the daily updates to the EFL learner's community through LINE (a text and voice communications social network application for smartphones and PCs owned and operated by the LINE Corporation). This group was required to access the community site via PC, smartphone or tablet and read the updates on a daily basis. They were also encouraged to respond to and mark "Like" on any posts that they found interesting. The latter group was made aware of the EFL learner's community but were not given any notifications or instructions for using the site.

3. The contents of the updates to the Global English Community

For the purpose of this study, an experimental community was established within the One Community site owned and operated by Pearson English Business Solutions. The main contents of the updates to the community during the study were divided into "English Language Tips" and "Facts about Foreign Culture". These updates were carried out in the form of a daily post to the community site.

4. Results and observations

The questionnaire taken by the participants at the end of the study reflected an increase each one's individual motivation with regards to studying the English language. The students felt that overall the system was relatively easy to access, but also noted that while the posts were interesting, there were other topics that they would have liked to read, such as various ways in which to study English. A possible longer study which incorporates the information gathered through this study and a revised system with more freedom afforded to the learners within the community to create their own content is something that we would like to explore in the future.

References

Jaggars, S.S., Edgecombe, N., & Stacey, G.W. (2013). What We Know About Online Course Outcomes. *Research Overview*. Retrieved from <http://ccrc.tc.columbia.edu/publications/what-we-know-online-course-outcomes.html>

実演紹介：英語不規則動詞変化形提示ツールと フラッシュ型例文・対訳提示ツール

Demo: Conjugation Presentation Tools and Bilingual Sentence Flashcard Presenter

神谷 健一（大阪工業大学）

キーワード：ICT, 授業支援ツール

本発表では発表者自身がデータベースソフトを利用して開発した授業活性化に繋がる 2 種類の教材提示ツールを活用事例を含めて実演紹介する。前者は <http://goo.gl/2rUZSM> にて、後者は <http://bit.ly/1J7ZkOO> にて、それぞれの操作マニュアルを含めて無料公開しているので発表の前後に参照されたい。対応 OS は Windows XP 以降および Mac OS X 10.7 以降である。

トランプを使った討論活性化と評価

Activation of Classroom Discussion and Evaluation

成田 修司（大阪大学非常勤）

キーワード：討論, 評価, 採点

「双方向授業」の必要性が叫ばれて久しいが、学生による口頭発表や討論の活性化、そして評価の手段として、トランプの活用法を紹介したい。学生全員が解説・討論の準備を整え、設問解説から討論まで学生主導で積極的に進められる環境を、トランプを利用して整える。教員は教えるのではなく、討論を整理する司会役である。筆記試験もトランプを利用することで、個人情報の保護に配慮しつつも学生同士に採点させる事が容易になる。

学習者の積極的な授業参加につながるカードの活用法

Use of Playing Cards to Encourage Active Participation

浦野 研（北海学園大学）

キーワード：トランプ, 授業参加度, グループワーク

外国語の授業でも PC やタブレット端末等が積極的に活用されているが、コミュニケーション能力の育成にはやはり対面での活動が欠かせない。すべての学習者が積極的にコミュニケーション活動に参加できるわけではないため、教師による手助けが重要になる。本発表では、発表者が担当する英語授業において、積極的な授業参加をうながす手段としてカード（トランプ）を利用したいいくつかのアイデアを、実践例とともに共有したい。

ノートアプリで授業をよりアクティブに

Activate the Classroom with Notebook app

中西 正樹（摂南大学）

キーワード：手書き, アプリ, 授業支援ツール

タッチパネルを採用した PC やタブレットが普及するとともに、フリーハンドによる書写や音声の挿入、共同作業などを可能とする「ノートアプリ」を利用する機会が増えている。その一つ「白板」は直感的に操作できること、素材の移動やネットワークによる共有が容易なこと、無料（有料版もある）であることなど、教室で使いやすく作られている。学習者どうしがリアルタイムに手元の情報を発信、共有するツールとして活躍するだろう。

授業と連携した自学ノートの活用方法

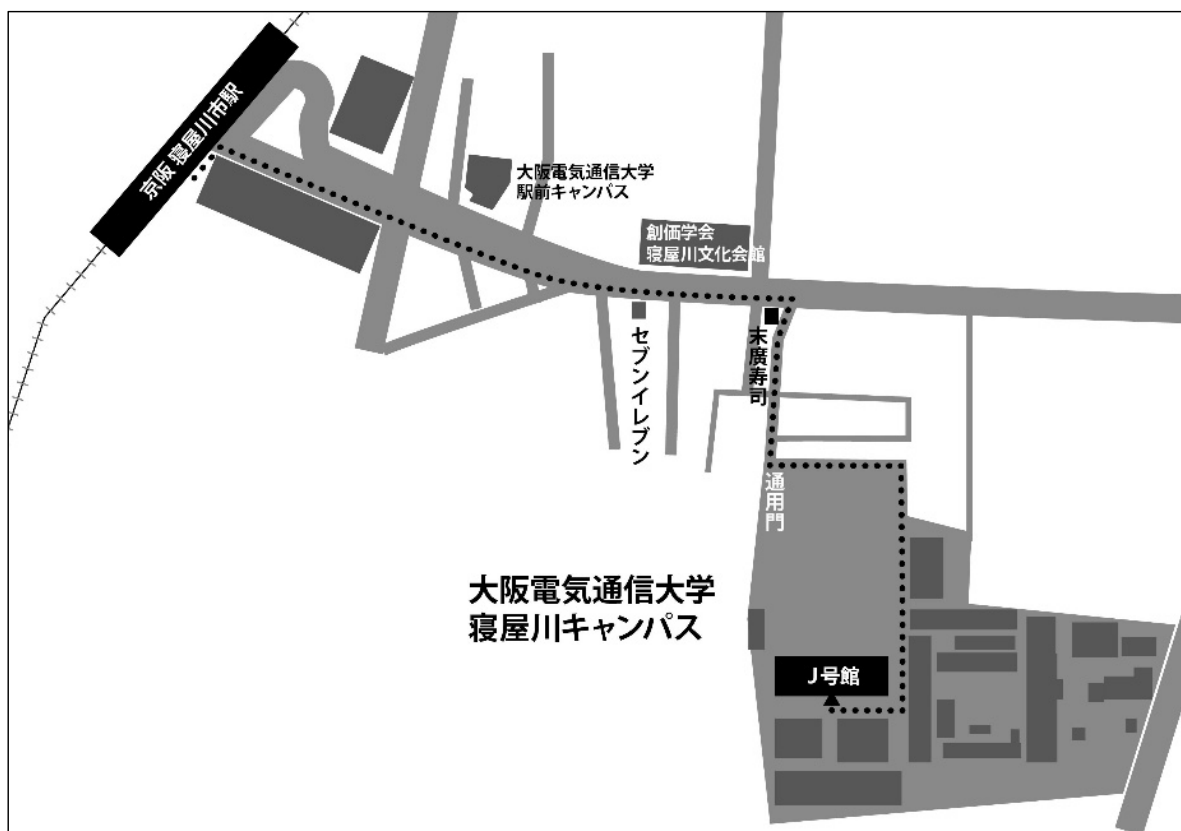
Connecting the Personal Notebook with the Lesson

中原 智昭（東大阪市立意岐部中学校）

キーワード：自学ノート, 家庭学習, 中学校

英語の学習内容の定着に、家庭学習は重要な役割をしめる。しかし、家庭学習をさせようと、ただ自学ノートを用意しても、その学習の方法がわからないと、取り組めない生徒もいる。その改善のために、授業内容と連携した家庭学習の方法を提示し、授業でのワークシートを活用した自学ノートの課題を生徒に示してきた。本発表では、その実践を発表する。

会場への交通案内・会場案内図



大阪電気通信大学寝屋川キャンパス 〒572-8530 大阪府寝屋川市初町 18-8

TEL 072-824-1131 (代表) FAX 072-825-4589 ○京阪本線寝屋川市駅下車 徒歩7分 [急行(快速急行) 停車駅]

図中の A ～ Z は号館を表しています
(A → A号館)



Progress

学生の熟達度が明確に！
4 技能+文法力+語彙力が計測できる
オンライン英語運用能力テスト。

スピーキングには Versant™ の
テクノロジーを採用

((())) VERSANT™

1. スピーキング・ライティングも計測
4技能と文法や語彙力など、総合的な英語運用能力スキルを測定。
技能毎にスコアが測定されるため、日々の学習課題が明確に把握できる。

2. 3 回のテストが1セットに
1セットに3回分のテストが含まれているので、
例えばセメスター毎の熟達度が測定可能。

3. スピーディに結果を算出
約 60 分の試験終了後、自動採点システムにより通常 15 分以内で
結果を算出。ウェブ上での結果確認が可能。

4. アダプティブ方式を採用
受験者の解答により出題内容が変化。
より正確な英語力が測定できる個別対応型。

[どのテストを受けるか、6つの英語力レベルから選択可能]

GSE	10	20	30	40	50	60	70	80	90
Progress 65-80									
Progress 55-70									
Progress 45-60									
Progress 35-50									
Progress 25-40									
Progress 15-30									
CEFR	<A1	A1	A2 ⁺	B1 ⁺	B2 ⁺	C1	C2		

*Progress 65-80 は 2015 年秋にリリース予定

[幅広い出題形態]

- | | |
|-------------|------------|
| 1. 選択問題 | 8. 描写問題 |
| 2. 穴埋め問題 | 9. 音声認識問題 |
| 3. 並べ替え問題 | 10. 要約問題 |
| 4. 読解問題 | 11. 作文・小論文 |
| 5. 音読問題 | |
| 6. ディクテーション | |
| 7. リピーティング | |

www.pearsonelt.com/progress

Join the conversation
#testingprogress

ピアソン・ジャパン株式会社
www.pearson.co.jp

〒106-6021
東京都港区六本木 1-6-1 泉ガーデンタワー 21 階
Tel: 03-5549-8630 Email: elt.jp@pearson.com

Progress のスコアは、
グローバル・スケール・オブ・イングリッシュに
準拠しています。

詳しくはこちらをご確認ください。
www.pearson.co.jp/company/gse

グローバル・スケール・オブ・イングリッシュ (GSE) とは？
グローバルに比較可能な英語能力の客観的指標で、10 から 90
のスコアで英語能力を評価するもの。



ATR CALL BRIX

ATR Computer Assisted Language Learning System

目的に合わせて、効果的な学習ができる！ 英語学習 e ラーニングシステム

内田洋行

公共本部

東京 〒135-0016 東京都江東区東陽 2-3-25

☎ 03(5634)6402

大阪 〒540-8520 大阪市中央区和泉町 2-2-2

☎ 06(6920)2641